

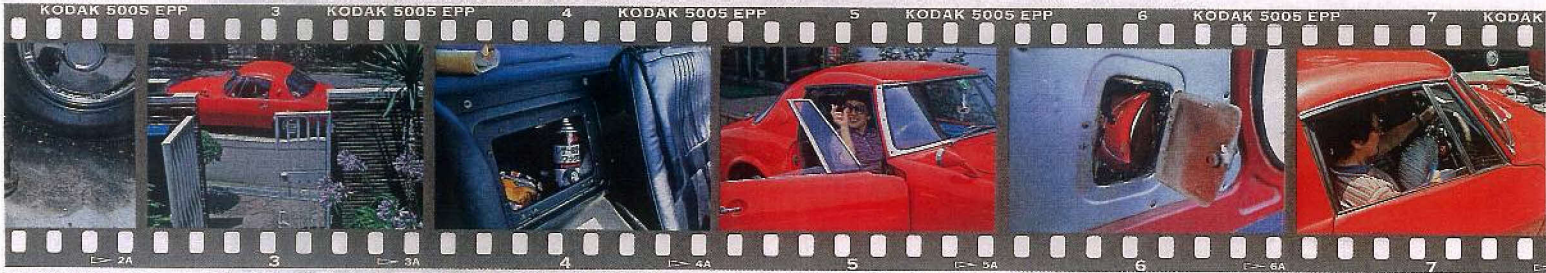
走らなヨタハチ  
「がっしりだ」

# TOYOTA SPORTS 800 UP 15

アルミ製トップは、一台ごとにタルガ部分と調整して製造された。



●画家という部分を差し引いても、こんなサングラスをかけるほど日 outgoing さんは、オシャレ心を失っていない間違いない女性だ。交通安全金パッチを持つというモハシドライバーでもある。



左は走行中に折れてしまったというクラクシャフト。轟音を上げながらも自宅まで走れたそうだ。右から2番目のようにセンターピラーに換気口はあるが、焼け石に水なのでウチワが必需品。

かったそうだ。

「ところが、こっちのほうが安いといって、息子たちが見付けたクルマを名古屋まで見にいって……これはいい、これにして、と。私が返事をする前に勝手に契約までしてきたらしい」ということで、ヨタハチになったのである。

ヨタハチは、ベースが大衆車のパブリカとはいえ、かなり趣味と個性に走ったクルマである。日 outgoing さんがヨタハチを買ったところから、日本のクルマは大きく変わっていった。より多くの人が購入するようにになって、マーケットを重視した最大公約数的なクルマがどんどん増えていった。

大手を振って世界をリードしていたこのアメ車が、今見ると、どこのメーカーのクルマも同じに見えるように日本のクルマも、詳しくない人からは大同小異の違いしかないクルマに変わっていったのである。

話を戻して、ヨタハチは作るほうもかなり趣味に走ったクルマである。今風に言えば、カルト。ベースのパブリカは別として、ヨタハチは初めて純粹に風洞実験から生まれた一台なのである。ボディの設計を担当した関東車体の責任者は、もともと航空機を設計していた人物というの有名な話だが、試作車はドアが無く、ムスタングP51のキャノピのようなスライディングルーフを開閉して乗り込むという、全く戦闘機的な発想だった。アルミを多用した重量が580kgのボ



●平板だが、メーターが独立した本格的なスポーツカーのインパネ。ステアリングの革は日 outgoing さんが着いたものである。

ディを、僅か800cc45馬力のエンジンで最高速度155km/hまで引張り、なおかつ燃費がリッターあたり31kmという驚異的なヨタハチのスペックは、やはり航空機流体力学の産物だったのだ。だが日 outgoing さんは、そういったカタログ的なことよりも別の恩恵を受けることが多いと言う。

「買った当初は赤いクルマが少なかったでしょ。で、今は珍しいクルマだから、周りのドライバーが注目してくれて、わりと親切に道を譲ってくれたりする。止めておいても、クルマの好きな人が話しかけてくることが多い」そうだ。

話しかける人は必ず、「趣味ですか」と冗談半分に聞いてくるが、日 outgoing さんはホントに趣味のためにヨタハチを買った（買わされて）しまったのである。そして、多趣味である日 outgoing さんは、冬になると助手席にスキー板を同乗させて六

